

前田河広一郎『支那から手を引け』論

—「北伐革命軍上海入城前後」を手がかりに—

邵 金 琪

はじめに

前田河広一郎は、一九二八年、十月より翌年三月まで中国へ旅行した。一九二九年五月、「上海の宿」(『改造』)、七月には随筆集『悪漢と風景』(改造社)を発表し、中国訪問の所感である「大きく動く支那」を含む八編が収録された。それ以来、中国への関心を持ち続け、五・三〇事件に端を発し、そこから広東における沙面事件などを描いた長編小説『支那』(『中央公論』一九二九・三・五、七・九月)を発表した。田口律男の「上海表象のリミット——横光利一と前田河広一郎¹⁾」では、『支那』は革命の蜂起する中国民衆に同調しつつも、大胆に虚構を織り混ぜながら、仮借なき帝国列強のパワーバランスの中で、中国革命の可能性と限界をアクティブに表象しようとし、こうした

表象のデイスポジションは同時代においてほとんど類例がないと指摘されている。そして、一九三〇年十一月に『支那から手を引け』(日本評論社)が出版される。「日本の無産大衆にわかりやすいやう、支那革命に理解を持つやうに、生きた具体的事実と芸術的表現とから出発し²⁾」、五・三〇事件に続き、一九二六年から一九二七年にかけての北伐革命軍上海入城に呼応するため³⁾の上海三次暴動を描く小説である。

『支那から手を引け』においては、主人公を日本と中国の革命運動に参加させ、両地での革命運動の形式の対比がなされている。また、五・三〇事件と沙面事件を描く『支那』と違い、日本人が中国の革命運動に参加することは、無産革命運動が進展していることを示唆していると考えられる。本稿では、北伐革命軍上海入城前後を中心に、一九二六年から一九二七年にか

けての日本と中国の無産階級運動の状況を踏まえた上で、革命都市上海の革命状況の複雑さを分析する。さらに当時の歴史的事実と照らし合わせ、前田河の共産革命に関する認識がいかに作品に織り込まれたのか、そして革命運動の出来事をどのように作品空間に表象したかを考察していく。

一、前作「假面」との比較

小説の成立はやや複雑で、序文には、小説が里村欣三と前田河の共同製作であることや、小説が成立するまでの過程が詳しく書かれている。里村は旧稿「スパイ」を一九二九年に再創作し、百二十枚の原稿を執筆した。前田河広一郎はその数十枚に改稿し、完成した作品を「假面」と題し、一九二九年七月十六日から八月十六日まで『福岡日日新聞』に掲載した。しかし、「假面」は失敗作だと思った前田河と里村は、新しい作品を書くために、一九三〇年三月から四月に亘って三、四回打ち合わせをした。その打ち合わせの途中で、前田河と里村が所属している労農芸術家連盟内に「代作問題^③」があり、里村は七月にいったん合作を諦めた。しかし、前田河は小説の最初の五六十枚の里村の書き出しに加え、里村の満州放浪時代の経験を取り入れ、

その他を全部新しく書き足して、『支那から手を引け』を発表した。

「假面」と『支那から手を引け』の大きな違いは三つある。一つ目は、日本の無産階級革命運動に関する描写である。「假面」の最初の場面は、主人公が上海行きの船上におり、小説の舞台のほとんどが上海である。それに対し、『支那から手を引け』の始まりは東京を舞台にし、主人公の田中功は東京の革命運動に参加する。その経験によって、田中に革命への意識が芽生え、上海の革命運動に参加することになる。その運動については、次の章で詳しく分析していく。

二つ目は、主人公が上海で社会主義者の身代わりになって運動に参加したという設定である。「假面」では、主人公平田修が日本の警察に追われた日本人の社会主義者に顔がよく似ていて、かつてハルビンで間違って逮捕されたことも同じであり、冒頭の上海行きの船で、社会主義者の仲間と会った時にも一度社会主義者に間違えられる。ハルビンで社会主義者に「仕立ててしまわなければならぬといふ錯覚の下に、犬のように痛めつけ」、拷問を受けたことが描かれており、平田にとって、それは回想したくないことである。これに対して、『支那から手を引け』の主人公の田中は、満州での体験を通して当時の中国各

地の革命運動に惹かれ、「世界に渦巻く階級戦の中へ飛び込もうと決心し」、ロシアへ行こうとしたが、ハルビンでの革命運動への参加は、結果として失敗であった。東京やハルビンでの革命への参加の試みは、全部田中の一人でのチャレンジであり、「未組織大衆」の活動となってしまう。こうした経験が、上海での革命参加につながったと考えられる。上海で革命運動に参加できたのは、田中の一人での努力ではなく、社会主義者たちからの連絡があつたためである。彼は仲間の一人として認められ、社会主義者の身代わりになることによって、本格的に革命運動を行うようになる。

三つ目は、上海での中国人革命者の活動である。「假面」では、主人公が住む場所の「義豊里」の中国人たちが革命に身を投じることがしばしば描かれ、彼らの活動を見た主人公の平田は行動をともにしようと決心した。一方『支那から手を引け』では、中国人の描写が少なく、日本人革命者の活動がメインとして描かれている。それらが上海の革命状況とどのように関連しているかを確認する必要がある。

二、同時代の日本における無産階級政党的動き

『支那から手を引け』は、中国の第三次北伐戦争期の上海を舞台として、無産階級の革命運動に参加した日本人たちと中国人の労働者たちを中心に描いている。主人公の田中功は、上海に来てからプロレタリア精神に目覚めるのではなく、中国の東北地方に放浪していた時期から自覚し、日本に戻り、日本の無産階級運動を体験した後、上海に行く。田中がなぜ上海で革命運動に参加する決心をしたか、そして中国の無産革命がいかに独特であるかを描くために、小説の序盤の舞台は上海ではなく、東京に設定されるのである。

ハルビンから帰ってきた放浪人である田中功は、銀座で「支那から手をひけ！対支出兵に反対しろ！」と書かれた対支非干渉運動のビラが撒かれる様子を見る。それをきっかけに、田中はプロレタリアートたちに遭遇し、対支非干渉運動演説会場に行き、会場付近でデモに参加させられ、暴乱の中、警官に追われ、かろうじて逃げ切ることになる。

小説には、具体的な日付は書かれていないが、最後の第十八章では、三月二十一日という第三次暴動が成功した日付があり、作品は主に一九二七年三月の第三次武装暴動前の上海を中心に

描いたことがわかる。その前年の七月から、国民革命軍総司令となつた蒋介石が、約十万人の全軍に動員令を發し、国民革命軍による北伐戦争が開始されていた。国民政府の所在地の広東から、武装した労働者、農民に支援されながら国民革命軍は北上し、各地の軍閥を敗退させ、武漢、南京を占領して上海に迫つた。

同時期の中国の国民革命を支持するために、日本の無産階級者たちは対支非干渉運動を提議し、一九二七年一月から正式に宣伝し始める。一月十五日の『無産者新聞』では、「打倒帝国主義を目ざし、破竹の勢で進む北伐軍、世界戦争再び起らんとす、対支非干渉運動を起せ！」という記事を掲げ、中国の国民革命運動は世界無産階級運動において、今やロシア革命に次ぐ、偉大なるアジア被圧民族解放闘争の先頭に立つたと認め、日本無産階級は、中国国民革命運動の成功のために全力を挙げて戦うと宣言した。特に、日本軍の即時撤退、既得利権の放棄、国民政府承認、不平等条約廃棄、分割支配反対をスローガンとし、二月頃から各無産団体のほとんど全ては、宣言あるいは決議に、対支非干渉を掲げた。その叫びは日本各地に捲きおこり、遂に出兵断行を受けて、対支非干渉全国同盟に結実し、以来、出兵反対、撤兵要求、中国視察団派遣などの運動を行った。特

に影響があつたのは中国視察団で、八月二十六日に東京から出発し、二十八日に福岡に到着したが、全員が検束送還されたことにより、対支非干渉運動が全国の組織として確立された意義が全階層に知れ渡つた。⁵⁾ 中国の国民革命運動は中国国内だけのものでなく、国際的に支持され、国際勢力にも運動が浸透しつつあり、当時の無産革命運動には、より国際的にするべきだという理念が窺える。

『支那から手を引け』において、田中功が対支非干渉運動を経験するのは、上海に渡る前、運動の初期にあたる時期である。世の中の大新聞や、帝国議会が騒ぐような問題ではなく、一般民衆にははつきりとした運動であるかどうかはわからなかつたが、こっそり撒いていく撒きピラや電柱に貼つてある手札形のピラで、労働者の間に広がつていた。作品の最初に登場したプロレタリアートの労働服の二人は、銀座でピラを撒いて消え、田中が再び彼らと遭遇したとき、好奇心が生じた田中は、自ら彼らに話しかける。しかし、二人は決して運動参加希望者を歓迎するような態度ではなく、彼らは田中のことを未組織大衆と決め付け、同じくプロレタリアートの仲間として認めなかつた。「未組織大衆——へツ、支那も知らねえで、対支非干渉運動と来てやがらア。チャンチャラ可笑しいぢやないか！」という田

中の言葉は、日本の無産階級運動の状況が単なる空想にすぎず、民衆の理解が得られない運動にとどまることを暗示している。

当時の日本のプロレタリア政党には、大きな問題があった。

一九二六年十二月九日の『大阪朝日新聞』の社説には、「社会の現実に対する省察の不徹底、確信なき観念的闘争、あまりに指導者中心に過ぐる組合組織、第三インターナショナルを信奉する一派の拙劣なる策戦、労働運動者の思想的頹廢」などの問題がまとめられ、これらの問題は運動の発展を妨げているばかりでなく、政党的団結に対して障害をきたしていることが論じられている。田中のような、プロレタリアに興味を持ち、かつてロシア革命に憧れ、ロシアに行こうとした労働者も仲間に入れなかったことは、当時の日本の無産階級革命の弱点を示し、中国の無産階級革命の国際勢力の脆弱さを示唆しているようである。こういった設定から、日本の一般民衆の無産革命への無関心及び社会主義者たちの排他性などを批判しているように読み取れる。日本のプロレタリアートの活動は、中国で活躍している共産党員たちの動きとは対照的であり、中国における国民革命運動をより明確に浮かび上らせることになるだろう。

また、田中は日本の運動者に排斥されたが、そこで革命運動への参加を諦めたのではなく、東京での「対支非干渉示威演説

会」に参加しようとした。しかし、演説会は解散させられ、群衆は警察に追われる。田中は警察官から逃げようとした自分が「臆病」であると思ひ、わざともう一度交番に戻る。このとき、彼の心に、正々堂々と無産階級革命に参加し、活躍したいという種が蒔かれたと考えられる。では、田中の活躍はどのように描かれているか、彼の活動が何を暗示しているかを明らかにしていく。

三、上海三次暴動の裏で動く日本人たち

『支那から手を引け』は、一九二六年十月以降の上海における革命運動を中心に描かれている。革命の結果として、第三次暴動が成功し、市民政府の成立が実現したが、わずか三週間後、内部分裂し、蒋介石によるクーデターで革命の成果が奪われた。しかし、上海三次暴動は中国共産党が主導し、「北伐と中国国民運動のクライマックスをなすとともに、中国革命の諸矛盾の焦点ともなった」と指摘されている。その矛盾を讀者に理解させるために、前田河は北伐革命の歴史に従いながら、中国人労働者、中国人巡査、中国人共産党員、日本人共産党員など、中国の国民革命運動を支持する人々を描いている。一方、帝国主

義各国は、中国の国民革命運動の中、自分たちの利益を守るために、軍隊やスパイたちを上海に送り込んだ。この革命運動と帝国主義や資本主義との間の溝の深さを描き出すために、中国国民革命における対立的な立場に立つ日本人たちもまたこの小説には多く登場する。特に、二つの勢力を代表する日本人たちを描き、革命状況の複雑さを描こうとしている。彼らの間で活躍するのは、主人公の田中である。彼は上海という舞台で、それらの日本人たちと接触するうちに、一人前の社会主義者に成長する。田中と二つの勢力の日本人たちの関係性を確認しながら、革命運動の複雑さを描こうとしている作者の意図を明らかにしていく。

中国の国民革命の反対者あるいは日本の帝国主義支持者として描かれる人物には、田中功が満州で知り合った大友天来、新聞社を経営している松山覚次郎、日本領事館のスパイであるユーカリのとみ子の三人がいる。田中が上海に到着するのは、ちょうど北伐革命が始まった一九二六年十月の末である。すでにその時から、上海には不安定な空気が漂っていた。当時の上海の情勢について、大友は以下のように述べる。

差し当たりこの上海なんだが、ここでは総工会という労

働者の組合が威力を張つとるんぢや。この総工会は、事実上海陳独秀一派の中国共産党の指揮の下に動いてゐる奴でな、現にこの八月廿日、内外綿第五、第六、第八、第十二工場でストライキをやらかしてからに、一万人から無知無能なちゃんコロ共を罷業させ、この先月半ばにやつと解決したわけさ。それには、総商会の虞洽卿が仲へ這入り、総領事やここに居られる松山さんなどいろいろ斡旋された結果、米の手当てを一人分一日で大洋三分を増す、それから工場内に警官だけは入れないといふ協定条件で解決したのだ。⁽⁸⁾

田中が上海に到着した時期に、上海で実際に発生した第一次暴動では、当時の中国共産党員五、六千名のうちから決死隊を募つて八十名が上海市中のそこそこで暴れる計画を立てたが、これは失敗に終わつて上海総工会の幹部陶静軒、奚佐堯ほか十余名が犠牲となつて倒れるに至つた。⁽⁹⁾ このような歴史事実を前提として、前田河は一つの「虚構」を練り上げている。大友は田中に職を紹介するために、日本人倶楽部で田中を松山覚次郎に会わせ、そこで松山は一つの提案をした。

「わしらが貴方に折り入つて頼みたいことは、一つ支那

人苦力の間に潜り込んで、奴らといつしよに運動へ手を出すなり、ストライキを起こすなりして、思ふ存分に働いて貰ひたいこつたね。(中略) どうだね、男子緊褲一番してからに、この近代支那の舞台に冒険して見る気はないか?」(中略)

「早い話が——ストライキのプロカーみたいなことをやるんだね。」(中略)
「つまり、スパイをね、」

松山は、国家主義者で、共産党について研究した上で、日本政府の命令に従い、中国人の革命運動を阻止しようと目論む「高等」の関係者という道を選んだ。そういう人は上海にある工場の実況に詳しく、中国人労働者が革命を起こすときの敵になる。松山は単に仕事を紹介するのではなく、田中をスパイとして、中国人が働く日本の綿花工場に送り込もうとするが、田中はその疑惑を断る。これは田中と帝国主義者たちとの初めての対決である。

また、上海に来てから政治通になった大友は、田中のことを「赤くなつてる」と決めつけ、田中の考えに反対する。大友も一見普通の新聞記者であるが、日本の綿花工場で起きたストラ

イキに対して、「共産党の無頼漢どもは、日に日につけ上る一方でな、こやつ是が非でも徹底的に敲きつぶさんと将来恐るべき」と言い、日本の利益を最優先とし、中国の無産階級革命運動に反対しているようである。さらに、小説には日本人のスパイが何人も登場する。最初に登場するのは片目が見えないユーカリのとみ子であり、カフェを経営しているが、これは表の顔で、裏では領事館の手伝いをしている。日本の国内新聞で特種になった阿片密輸団を引つ捕らえた人とされる。田中とこれらの日本の「帝国主義者」たちとの描写によって、「革命都市」上海の裏で動く日本政府の意図が暴露され、「革命都市」の複雑性が強調されている。そして、上海で起きた革命運動が他国の出来事とはいえず、日本も関わっていることを示し、日本人の読者に関心を引き起こそうとしているのだろう。

大友たちのもとから逃げた田中は上海にいるたった一人の知り合いも失い、上海で放浪し始める。しかし、この放浪は日本の帝国主義者との対決を経て、田中が日本の帝国主義者の彼らと正式に裾を分ち、激動する上海の歴史に巻き込まれていく兆しであると考えられる。「民族的な自己防衛」と考え、中国の革命運動に反対している松山や大友のような日本人が日本の国家主義者の偏狭なナショナリズムを掲げていることを田中の口

を借りて批判的に描いている。「スパイ」を送り込むという虚構によって、日本のプロレタリアートが直面している帝国主義との対決の困難を暗示する意図が読み取れる。

一方、上海の労働者革命に協力している日本人もいる。林幸作と崎山国松（偽名は岡部要之助）という二人は、日本共産党の黨員であり、第三インターナショナルの關係で上海の共産革命に協力する立場にある。田中功と林幸作が瓜二つという設定は、小説中の最大の「虚構」である。田中の身に起きた出来事は全てその設定から始まる。田中は何回も共産黨員の林幸作に間違われ、そのおかげで崎山は田中に興味を持つようになり、その住所を訪ねた田中に崎山は一つの提案をした。

「二つのご相談があるんですがね。貴方これから林の代りになってくれませんか？身代りです。いや、どうせ大したことはないのですが——その、ご覧の通りスパイが尾行して先生閉口しとるらしいんだ。いいですか、これは、貴方を百パーセント信じて僕から御頼みするんですぞ！——つまり、何だな、結局、貴方が身代りになって、本物の林が活動し得るやうに、奴等を撒いて下さるといいんだ。どうですか？」⁽¹¹⁾

田中は林の身代りになり、そこから本格的に革命運動に参加し始める。崎山は、田中を革命運動の道へと導く人物であり、田中のような革命に興味を持つ外国人放浪者を見下す姿勢は見られず、「同志田中」という呼び方をして仲間として受け入れた。また、共産党幹部である本物の林幸作は、小説の前半が終わるまで、謎の多い人物であり、詳しい描写も田中が林の身代りになった後、「林幸作である自分は幹部であつて、いろいろな争議の指導や、資金の工面、政治的連絡や、外国のプロレタリアとの交渉に従事してゐるとは云へ、主としてその活動範圍は奥まつた密室内だけの話で、そこに目新しい刺激や、フレッシュな闘争性を挑発する抵抗を感じられないのだ」とあるにすぎない。一方、田中が林の代わりに、外部からの弾圧、スパイ、死の恐怖など、「あらゆるブルジョア機構の刺との引つかかり」という表面的な闘争生活を続け、名が知れ渡っていく。そして、身代りの任務を達成後、「日本へは当分帰らない。（中略）浦東の苦力の中へ入つて、俺の知つた限りの宣伝をするよ、煽動もするよ、運動もやつて見せる」⁽¹²⁾と本格的な革命に参加する決心を示している。その熱意を感じた林が、田中に「手をさしなべ」、田中も「ちよつと考へてから、その手をがしつと握つた」⁽¹³⁾

後、田中が正式に入党する。

このように、革命者が革命運動における組織の一員として活動することの重要性が伏線として何度も強調されている。上海に渡る前の田中は、東京で出会ったプロレタリアートの青年に、「われわれは、貴方のやうなプチ・ブル的な興味的立場は取れないんですよ。」と言われ、革命運動に従事する仲間として認められなかった。それに対し、彼は「未組織大衆——ヘツ、支那も知らねえで、対支非干渉運動と来てやがらア。チャンチャラ可笑しいぢやねえか！」と反発した。しかし、田中が組織に入らず、身代わりになった時期の活動も、最初のプロレタリアに興味をもっているだけの一般大衆から、本物の革命者になるための必要なプロセスである。田中のような労働者と林のような指導者になった共産党員たちは、組織の一員としてそれぞれの役割を果たし、革命運動に貢献していく。また、「仮面」に、「組織的な闘争の全体制と密接に結びついてゐない、個人的なテロ化は無産階級運動に非常な害悪を及ぼす」とあるように、個人の英雄主義なやり方は無産階級運動にふさわしくないとされている。田中が林の身代わりになった時期に、スパイを相手にし、派手な行動をやりすぎて、注意されたのもそのためではなかったか。

上海という舞台で中国の国民革命に対して違う立場に立つ日本人たちと田中がどのように革命運動の裏で活動しているかを描くことで、当時の革命運動にどのような特徴があるかがわかる。一つ目は、上海の革命運動が中国国民の民族解放運動であると同時に、日本などの帝国主義国家たちも関わっていることで、反帝国主義運動の性質も持つようになり、国際社会からの支持も必要となる。工場のストライキの阻止に取り組んでいる上海の帝国主義者の日本人たちが描かれ、「スパイ」まで利用するという強引な手段を使っても、中国人の正当な要求を妨害している。日本のプロレタリア思想を広げていくには、資本主義の思想だけでなく、帝国主義者たちの偏狭なナショナリズムとも対立を迫られる。中国の革命運動が、軍閥の支配から独立したいという反資本主義の無産階級運動の目的以外に、日本のような自分の国の利益を守りたい帝国主義国への反発という反帝の民族解放運動の性質もあることが描き出され、日本の中国に対する干渉に反対する前田河の意図も示されている。二つ目は、異国の革命運動で活躍している日本人の共産党員の描写によって、プロレタリア革命における組織の存在の重要さが強調されている。無産階級の革命運動における革命勢力を拡大するには、組織を活用すべきであるということが示唆される。

このように、『支那から手を引け』においては、「革命都市」としての上海を背景とし、各国勢力の争いの中、違う立場の日本人たちを交錯させ、強い具体性を帯びたストーリーを組み上げることで、日本人の読者に中国革命の複雑さを体験させようとしたものと考えられる。

四、上海三次暴動に関する小説描写と史実

蒋介石が指揮を取った一九二七年四月十二日の反共クーデター後、中国共産党の革命戦術は今までのロシアのような都市革命から、井岡山を拠点に国民党軍の「白色テロ」に対する困難な防衛戦を展開する戦術に転換していた。その戦術転換前の都市革命が上海における三次暴動である。結果は失敗であるが、大阪毎日新聞の村田孜郎は上海三次暴動について以下のように評価した。

或人はロシアの革命史に照し合わせあれをそのまま踏襲して失敗したのだとさえ評しているが、実際そう見えないこともない、いずれにしても極東において共産党がこれほど露骨なそうして大規模な革命運動をやつたのは彼等共産

党員の言に俟つまでもなく世界革命史上に記録せねばならぬことであるう、(中略) 今回の上海における共産革命は或は空前にして絶後のこととなるかも知れないと思われる、ともかく私は彼等が上海奪取にどれだけ犠牲を払うも厭わなかつたという事実により矢張り上海における今回の共産革命を極東における最も大きなかつ組織的な共産主義者の革命運動として取扱つてもいいと思つてゐる。⁽¹⁵⁾

このような世界共産革命史における重要な運動を描くにあたり、前田河は作品の「序文」で書いた通りに日本人にわかりやすく中国の革命を説明するように工夫している。ただ運動の過程を描くだけではなく、歴史的事実と虚構の間の距離をどのように構成したのか、そして、プロレタリア作家として、当時の革命に対する認識は如何に小説に表現されたのかにも注目したい。日本人に反感を抱く苦力たちや猥雑な風俗が溢れる都市の描写の背後に、革命運動の時間軸に沿つて現れてくる「革命都市」上海の深層的な部分が描かれている。前田河の考えを解説するには、『支那から手を引け』のテキストそのものと、上海三次暴動の進展に従つて発生する様々な歴史的事実との違いを確認することから始めなければならない。その違いにこそ、前

田河の想像力をうかがう糸口が隠されているからである。

上海三次暴動が発生する前に、中国国民革命の北伐戦争はすでに始まっていた。一九二六年十月までの中国全国の様子は『支那から手を引け』第八章で、大友が上海に到着した田中に紹介している。

列国の外交団では、今度武昌へ移転する国民政府を承認しようという議論が勝つてるやうな内報もある。この間広東国民党全体会議では武漢に首都を決定するちう決議が通過してゐるんぢやが、この前の中山艦事件以来、国民政府にも左派と右派がわかれてからに、だんだん分裂の徴候がはつきりして来た。蒋介石派政府が武昌に陣を構へると、ポローヂン一派は武漢三鎮を首都とすることになつたわけさ。¹⁶⁾

以上は上海三次暴動直前までの情勢である。実際に新しく成立した武漢国民政府を維持していたのは、中国共産党と国民党の左翼であった。中国共産党の指揮による共産主義革命が始まり、全国で労働運動が組織的に発展し、労働組合も急速に発展した。そこで一番注目されたのが上海での労働運動である。上海の労働運動は国民革命軍の進行と呼応するようになり、上海

三次暴動まで展開していった。

『支那から手を引け』は、この上海における革命運動をどのように受け止めているのだろうか。第一次暴動の時期に、上海に到着したばかりの田中は、革命に参加する機会がなかった。しかし、第一次暴動の失敗後、漢口の重要会議に参加する予定の林を守るために、田中は初めて上海の革命の舞台にデビューし、第二次暴動前までに、スパイの尾行から逃げ、共産党員密会に参加する芝居などをし、林の身代わりとして派手に活躍する。第二次暴動から四月十二日のクーデターまでは、中国人の共産党員として反動派の日本人の暗殺活動で革命に貢献した。「巡警射殺」、「武器の略奪」、「工人のストライキ」、「上海に溢れる難民」などの上海の暴動の進行が、林に偽装した田中の視点から、詳しく描き出されている。これらの出来事は生活実感が溢れる義豊里に集中し、義豊里の中で起きた変化が外の世界に反映されていく。

暴動前の上海の街は見えざる大洪水の襲来に慌てて準備しているやうな街だった。厄介なことには、襲ってくるものが思想であり、その思想に動員された無数のプロレタリアートであった。世界のブルジョアと相容れない階級意識

を持つた男や女が、プロレタリアートだけの持つ統制とイデオロギーの下に、新しい戦術を以て、全ての古い力に対して迫撃して来るのであつた。(中略) この水のように、風のようにな力は、自由に鉄条網や砂囊を乗り越えて、被圧迫民族である支那の労働者や農民のいるところには、必ずその感染力に応ずるものが見出すといふ不思議さを持つてゐた。⁽⁷⁾

革命への情熱は、形のない「水」や「風」になり、上海の隅々まで浸透していき、ようやく大きな力になる。街の様子だけではなく、巡警の包囲から見事に逃げ切つた場面や巡警を射殺する場面にも、革命に身を投じる人たちの姿勢が表現されている。これらの描写には、単なる歴史事件の紹介ではなく、暴動前の緊迫感を「革命都市」上海の人々の流れを通して表象しようという前田河の試みがある。暴動のときの軍隊の動きよりも、むしろこれらの事件に参加する人たちの姿勢や思想に重点を置いたのであり、暴動に参加する無産階級の人たちを阻止することができないという状況を見事に捉えている。

前田河がなぜ大規模な衝突のイメージを表現していないかを探りながら、主人公の田中功の描かれ方に注目したい。ハルビンでふた冬の自堕落な植民地生活を切り上げて、もっと大きい

冒険に出ようと、世界に渦巻く階級戦の中へ飛び込むことを決心した田中は、三度も無産階級運動に参加しようとした。一度目はハルビンを出発し、「ボクラチニーヤラの国境で弾ねつけられ、もう一度は東京学生主義者に問題にされなかつた」。日本の運動はもつと国際的に伸びなければ発展性はないと実感した田中は、三度目となつた上海では、どうしても革命に参加できよう、自ら共産党員たちにアプローチし、林の身代わりの任務を果たした。それをきっかけに、田中は入党し、第三次暴動まで上海の日本人帝国主義者の暗殺などに加わつた。中国の革命は、反帝の民族解放運動と反資本主義の無産階級運動という二つの性質を持つことから、田中が中国の革命に参加するには同じく帝国主義国の日本の国籍を捨てなければならなかつた。日本の工場で働く中国人の労働者たちを解放するには、日本人と対立する立場になるからである。つまり、「これから支那人になつちまふ」という覚悟をした田中は、その革命思想がハルビンにいたときより遥かに深化したといえる。苦力たちなどの労働者を仲間とし、より多くの群衆を吸収し、革命運動に参加させるといふ田中の革命戦術の正しさも、暴動の中で証明されていくことになる。当時中国で労働者が一番多い地域である上海における運動だからこそ、その状況を生き生きと描くこ

とができています。

また、小説の最後まで、共産党員として登場するのは日本人の二人と隠れ家にいた俄徳と青年たちのみで、それ以外に中国人共産党員の活躍する姿は描かれていない。実際には当時の暴動を成功させるために、「(上海) 総工会の命令に従わずに単独行動を取り、総工会の秘密行動を探つては会社側に密告するもの、或は罷業者切崩しのために別に別工会を作ろうとするものなど、主として工場主のために動いているものに対し種々なおどし文句を並べた脅迫状が郵送された」¹⁸⁾り、罷業強制方法として反動派工人を暗殺したりしていたが、小説では、林になった田中が活躍時から、当時の共産党の幹部である林が「あんまりやりすぎないといい」と懸念を抱え、過激な戦いには賛成しないという革命の方法が示される。しかし、身代わりの任務が果たされ、「街中に暴動の気分が濃厚」になったとき、日本人間のテロリズムが行われ、「支那から手を引け」というスローガンも全量化されるようになる。国民革命軍の上海入城に呼応するには、革命の手段も激しくなる必要があるという前田河の考えがそこには見られる。

田中功の目で観察された中国革命には、革命に関する前田河の洞察が含まれている。中国の共産革命は、蒋介石のクーデ

ターにより転機を迎えたが、民衆の力を借りて革命を起こす方法は決して失敗ではなかった。前田河は、「支那は動く(その¹⁹⁾)」では、「晩年の孫文は、無産階級を基礎とした闘争の展開によつて支那を革命し、その対外政策としてはアンチ・帝国主義の民族闘争を行はねばならぬという鉄のやうな意志を持つてゐた。その点、彼の農工、連俄、容共の戦術には、世界資本主義の現階梯に徹した深い洞察があつた」と評価した。本作の無産階級運動の描かれ方に、プロレタリア思想に賛成する農民、工人、国際勢力と連携することを支持する前田河の姿勢は窺える。作品空間に民衆と思想の力を何度も強調したのも、彼が「見えざる」洪水のような民衆と思想の力を信じたからにはかならない。三次暴動の舞台となった上海は、このような見えない洪水の襲来に応じて革命都市として表象されたのである。以上のように、前田河広一郎は、上海における革命運動の史実を踏まえながら、主人公の田中功を通して、帝国主義者の反動的な行動、共産党員たちの努力、中国人の労働者たちの貢献などを描き、「革命都市」上海の複雑さを表現している。田中がそれぞれの勢力の人々と交錯していくなどで、前田河の革命に対する考え方も浮き彫りになっていると思われる。

終わりに

前田河広一郎の『支那から手を引け』に描き出されているのは、単なる上海という街に起こった革命運動ではなく、日中のプロレタリアートたちが活躍した国際的な無産階級革命である。上海という国際都市で起きた革命は、各国の勢力が絡まり、革命の複雑さを示している。

本稿では、まず『支那から手を引け』における日中無産階級運動の関連性を確認するために、当時の対支非干渉運動を分析しながら、日本人たちを巻き込んだ中国革命を対照させた。次に、作品の登場人物の描写と出来事を拾い上げることにより、上海における革命運動の複雑さを指摘した。特に、主人公の田中の視点を通じて、上海における違う立場の日本人との関わりから、中国の国民革命の性質が確認でき、日本のプロレタリア思想の欠点をあぶり出すという作者の狙いもあった。最後に、物語の進展に従って、歴史的事実と作品空間の間のずれに注目し、小説が歴史的イベントそのものを描くのではなく、プロレタリア思想が上海の隅々まで届き、「革命都市」上海に住む人たちが運動への熱意にかられる過程の表現に重点を置くという作品の特徴を明らかにした。さらに、無産階級運動における群衆の

力や成功のために激しい手段が必要となるなどの革命運動の実施に関する前田河の考えも浮き彫りにした。

注

- (1) 田口律男「上海表象のリミット——横光利一と前田河広一郎」『戦間期東アジアの日本語文学（アジア遊学167）』、勉誠出版、二〇一三年八月三十一日
- (2) 前田河広一郎「序」『支那から手を引け』日本評論社、一九三〇年十一月
- (3) 岩藤雪夫の名前で発表された小説「工場労働者」（『工場労働者』現代暴露文学選集、天人社、一九三〇年）及び「訓令工事」（『改造』一九三〇年六月）が他人の作であるという告発があり、労農芸術家連盟内で論争になった。この処理を巡って、青野季吉、前田河広一郎、葉山嘉樹らと小堀甚二らが対立し、解決方法に不満があった平林たい子、長谷川進、今村恒夫が、同聯盟を脱退した。
- (4) 『無産者新聞』(2) 1927・1・1〜12・25 法政大学出版局、一九七五年
- (5) 注(4)、山田直三郎「対支非干渉運動はいかに戦はれたか？」『日本社会主義運動史』改造社、一九二八年二月一日、

339-344頁、栃木利夫「中国革命認識のための試論（対支非干渉）前後と戦後を中心に」『史潮』第一〇〇号、刀江書院、一九六七年六月三十日、209-222頁などを参照

(6) 「(社説) 無産政党組織の大混乱」『大阪朝日新聞』一九二六年十二月九日

(7) 坂野良吉「上海三次暴動と中國共産黨—上海革命の歴史的点検—」『東洋史研究』39(3)、一九八〇年十二月、557-551頁

(8) 『支那から手を引け』日本評論社、一九三〇年十一月十五日、93頁

(9) 唐振常主編『上海史』上海人民出版社、一九八九年

(10) 『支那から手を引け』日本評論社、一九三〇年十一月十五日、95-96頁

(11) 同前、163頁

(12) 同前、251頁

(13) 同前、252頁

(14) 前田河広一郎「假面23」『福岡日日新聞』一九二九年八月九日

(15) 村田孜郎「共産革命の足跡(一〜六)」『大阪毎日新聞』一九二七年六月四日〜六月十日

(16) 注(8)に同じ

(17) 『支那から手を引け』日本評論社、一九三〇年十一月十五日、193頁

(18) 注(15)に同じ

(19) 前田河広一郎「支那は動く(その二)」『改造』第十一卷第三号、改造社、一九二九年三月

〔付記〕

・本文の引用は『支那から手を引け』日本評論社、一九三〇年十一月十五日に拠る。・引用に際し、原則として漢字を通行の字体に改めた。

・本稿は、二〇二一年度日本語教育と日本文学研究国際シンポジウム(二〇二一年十一月十三日)における口頭発表に基づくものである。発表に対しご教示を賜った皆様や、発表の機会を与えてくださった皆様に、厚く御礼申し上げます。

・本稿は、日本科学協会の笹川科学研究助成による助成を受けたものである。

(し)よう きんき／本学大学院生)